
盗人

ゲーフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗人

【Nコード】

N4850A

【作者名】

グーフィ

【あらすじ】

一人の少年が屋敷からお宝を盗み出す。

（前書き）

初めて書いたので文章の構成も内容もおかしなところがあるかもしれませんが、一生懸命書いたので、読んでもらえたらうれしいです。どうぞ、よろしくおねがいします。

人が一人もない静かな夜。

僕はある屋敷に忍びこんでいる。

周りには高価そうな絵や壺が並べられている。（壊したら大変だ。）
僕の名前はビル。16歳だ。今、僕はお宝を盗むために屋敷の廊下
を誰にもみつからないように歩いている。

もともと僕は細身だしすばしっこいので昔から何度もこうゆう屋敷に
忍び込んでお金や宝石を盗んできているので、なれているのだ
もちろんこの屋敷の構造も（長年？）のかんでだいたいわかるのだ。
しばらく歩いているうちに、またも長年のかんでお宝の入っていそ
うな

ドアをみつけた。頑丈そうなドアだ。

でも、鍵を一ヶ所かけているだけで、あとはなにもししていない。

（今回の盗みは簡単に終わりそうだ。）

僕はポケットからピンセットを取り出し、ドアに鍵を開け始めた。

始めのうちは、感覚がつかめなくて苦戦したけど、すぐに

感覚をとりもどし、鍵をあけることができた。

（楽勝！！）そして、僕はドアを開けようとした。・・・あれ？

ドアが開かない。押しても引いてもビクともしない。

（おかしいな、なんで開かないんだ）

その時、僕の目に、ドアの横にある花瓶が映った。（まさか・・・

そんな映画みたいなのがあるはずないよな・・・でも

もしかしたら）

僕は、花瓶を持ち上げた、しかし、花瓶の下にはなににもない

（まあこんな所にスイッチなんかはないよな・・・）

僕は少しがっかりして、戻した。ところが、うっかり手を

滑らせてしまった。花瓶が床に落ちていく。（やばい・・・）僕は

花瓶に手を伸ばした。あともう少しで手が届く。・・・よし

つかめたぞ。でも、そううまくはいかなかった。

僕はまた手を滑らせ花瓶を落としてしまった。とうとう花瓶が地面に直撃してしまった。そしてすさまじい音とともに

花瓶が割れた。やってしまった。今日は厄日だ。

僕は急いで近くにある棚の影に隠れ耳をすました。

よかった。誰も気付かなかったようだ。僕は花瓶を片付けようと

花瓶のちかくに寄った。（証拠は残さないようにしなきゃねー・・・

ん？）

僕は、破片の中にスイッチがあることに気付いた。僕はそれを拾いスイッチを押してみた。それとともに、あの開かなかったドアが音もなく開いた

のだ。

僕は興奮してなかに入った。（ドアがこんなにすごいなら、お宝はもつとすごいに違いない。

予想通りものすごいお宝が僕を待っていた。

僕は早速お宝を盗みはじめた。（できるだけ高そうな物を盗もう。）

手始めに近くにあるネックレスに手を伸ばした。僕はそれを

ポケットに忍ばせ、次のお宝を求めて歩き出した。

しかし、一步目を踏み出した瞬間、またもやなにかのスイッチ

を踏んでしまった。もちろんそれは警報機だ。

カチ！・・・・・・「へ？」

警報機が鳴り始めた。「しまった。」僕は急いで周りのお宝を取って部屋を出た。まだ、警備員は来ていない。今ならまだ逃げられる

かもしれない。僕は全速力で来た道を戻り始めた。

外まであと少しという所で警備員に見つかってしまった。

（もうだめかもしれない）僕は警備員に捕まらないように走った。

でも、警備員と僕の間は埋まっていく。そうこうしていると、前方からも警備員が来てしまった。僕はわき道を見つけ、そこお猛スピード

で駆け抜けた。そして、そこにある窓を突き破り、外に飛び出した。
こうして僕は、お宝とともに脱出に成功した。
あとの仕事は、このお宝を売るだけだ。
いくらになるかが楽しみだ。

（後書き）

お手数ですが、感想を書いてもらえませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4850a/>

盗人

2010年10月15日23時17分発行